2011.9.3

没後100年 最後のシンフォニスト　マーラー 第8回

珠玉の小品 コーナー
シベリウスの名品

プログラム

昨年の生誕150年、今年は没後100年と2年に渡ってマーラーを特集するシリーズの第8回目です。今回は歌曲集「亡き児をしのぶ歌」と交響曲第8番を取り上げます。この歌曲集はドイツの詩人フリードリッヒ・リュッケルトの詩集「亡き児をしのぶ歌」から5つを選んで1904年に作曲されましたが、３年後の1907年に自身が長女を失ったことからマーラーはこの現実を予感していたのだ、とも言われています。しかしこれが正しいとは言えないまでも、この作品が非常に深く心に突き刺さるような切実感を持った音楽であると言えるのも事実だと思います。交響曲第8番は俗に「千人の交響曲」と呼ばれます。これはあまりの規模の大きさに楽譜の出版商が与えた名称が発端となったと言われていますが、全編声楽に彩られたカンタータ（器楽伴奏付の声楽曲）風の交響曲と言えるかも知れません。第1部では、地上からの天国の創造主への呼び掛け、第2部では人間が諸罪悪からの救済を経て天国へ昇っていく、という天と地を結びつけた栄光への賛歌とも言える作品で、取分け終盤、神秘の合唱からクライマックスへの高揚感は感動的です。

珠玉の小品コーナーはマーラーと同時代の作曲家シベリウスの作品です。アンダンテ・フェスティヴォはシベリウスお気に入りの曲だったようで、自身の葬儀の際にも演奏されたと言われる荘厳な美しさを持った佳曲。６曲あるユモレスクは若い頃ヴァイオリニストを目指していたこの作曲家らしい多彩なヴァイオリンの妙技を味わいつつ、小意気な愛らしさを持った小品集です。悲しきワルツはシベリウスの最も良く知られた小品ですが、ヴァルス・ロマンティクは叙情的でロマンティックな軽めのワルツ、カンツォネッタの方はもっと深刻でメランコリックなワルツの秀曲です。

今日はマーラーの2曲の名作と、シベリウスの比較的珍しい小品の数々をお楽しみください。

＊＊＊＊＊＊＊

★珠玉の小品 コーナー

ジャン・シベリウス（1865～1957）：

アンダンテ・フェスティヴォ（祝祭アンダンテ）op.47

チャールズ・グローヴス指揮ロイヤル・リヴァプール管弦楽団　（EMI盤）

ヴァイオリンと管弦楽のための“2つのユモレスク”op.87 ～ 第1曲

ヴァイオリンと管弦楽のための“4つのユモレスク”op.89 ～ 第2曲、第3曲、第4曲

レオニダス・カヴァコス（ヴァイオリン）／ヤックヤ・リン指揮ローザンヌ室内管弦楽団
（1994.4.17　ローザンヌ、ボーリュー劇場でのLive）～米倉ライブラリーから～

グスタフ・マーラー（1860～1911）：

歌曲集“亡き児をしのぶ歌”

1. いま太陽は明るく昇る ～ 2. いま私には分かるのだ ～ 3. お前のお母さんが
4. よく私は考える ～ 5. こんなひどい嵐の日には

ジャネット・ベイカー（メゾ・ソプラノ）／ラファエル・クーベリック指揮バイエルン放送交響楽団
（1971.6.20　ウィーン・コンツェルトハウス大ホールでのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

★珠玉の小品 コーナー

ジャン・シベリウス（1865～1957）：

劇音楽“クレオマ（死）”op.62 ～

ヴァルス・ロマンティク（ロマン的ワルツ）op.62b ／ カンツォネッタop.62a

チャールズ・グローヴス指揮ロイヤル・リヴァプール管弦楽団　（EMI盤）

劇音楽“クレオマ（死）”op.44 ～悲しきワルツ

渡辺暁雄指揮ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団
（1982.1.28　福岡サンパレスホールでのLive）

グスタフ・マーラー（1860～1911）：

交響曲第8番変ホ長調“千人の交響曲”～ 第1部 賛歌“来れ、創造の主なる聖霊よ”から、第2部 ゲーテ“ファウスト”の終幕の場 から

バーバラ・ヘンドリックス、テレサ・ツィリス・ガラ、バルバラ・フォーゲル（ソプラノ）
ローラ・マイヤーズ（メゾ・ソプラノ）／ケネス・リーグル（テノール）／ジークムント・ニムスゲルン（バリトン）
ペーター・メーヴェン（バス）／ロンドン・フィル合唱団／フランス放送合唱団／パリ児童合唱団
小澤征爾指揮フランス国立管弦楽団／フランス国立フィルハーモニー管弦楽団
（1979.6.11　パリ、サン・ドニ聖堂でのLive）